COMBAT
コンバットマガジン
Mar.,2019
No.516
3

Cover Photo
via Jay Borman
ⓒ WORLD PHOTO PRESS 2019
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

017

THE ILLUSTRATED ENCYCLOPEDIA

NAM

好評! 第2回 ベトナム戦争雑学辞典

004 LRRP カミーズアンドダイヤモンズ
Cammies and Diamonds
神出鬼没のダイヤモンド by Jay Borman

012 第5回サイゴン物語 Saigon Memories
はまるヤンシン市場

『バイオハザード RE:2』&『ライトニングホーク.50AE 10インチ マグナポートカスタム』発売記念特別企画
064 竹内 潤氏×デカ島村
新春スペシャル対談

WESTERN ARMS
091 EXPENDABLESⅡ／GUN BLACK Ver.
●Photo&Text by Takeo Ishii

The Equipments of the U.S. Force
054 [現用米軍装備カタログ]
みんなの知らないBHD装備特集
NAVY SEALS編 Part2

東京マルイ×BIO HAZARD RE:2
～限定コラボレーションモデル～
070 Lightning Hawk
.50AE 10inch MAGNAPORT CUSTOM

072 ゲームOTTスペシャル
『バイオハザード RE:2』

074 Militaria Roundup!
U.S. Caliber.30 M1ライフル
（M1ガーランド）

080 5.11 TOKYO
COMBAT Recommend item Vol.3

082 ニッポンの力こぶ
『かが』立入検査隊

095 WESTERN ARMS
COLT M1911／BLACK ARMY

098 トイガンニュース
●WA　V12ハイキャパシティー 2トーン
●タナカ　S&W M629 PC V-Comp Ver.3 &」
S&W M49ボディガード／SJフィニッシュVer.2

102 NEW GENERATION STYLER by fujiwara

115 第2弾! ミリタリー・ウオッチ・スペシャルプレゼント

COMBAT FRONT LINE

051 MH-6 リトルバード・ヘリ、日本で復元?!
052 新作映画紹介『ちいさな独裁者』『ナチス第三の男』
053 時事コラム 教えて菊池さん!

086 シン・サバゲ三等兵 徹底抗戦!「菊池軍団VS サバゲ三等兵」2018年撃ち納めゲーム!
100 新製品てんこ盛り! COMBAT mono
110 サバゲ三等兵APS
112 コラム ベトナムを遠く離れて――。文／小倉 徹
113 レアミリタリーテクノロジー
114 兵装嗜癖
116 PRESENT
125 CIC

THE ILLUSTRATED ENCYCLOPEDIA

NAM

ベトナム戦争雑学辞典

構成／コンバットマガジン編集部

第５歩兵師団のSSI（Shoulder Sleeve Insignia）とレンジャースクロールの組み合わせ。P中隊はPの音声コード“パパ”からパパカンパニーレンジャーと呼ばれていた。

敵地に向かうP中隊のギャリーノートン。左肩に第５師団のSSIはないが、レンジャースクロールにはPの文字が見える。頭と首に巻いたオリーブグリーンの三角巾とフェイスペイント、そしてERDL迷彩服の色調が見事に調和した美しい写真。

P中隊のキャンプでポーズを取るのは左からブレナン、ノートン、ギル。官給品のERDL迷彩服を着ているのは右のギルだけで、ブレナンは南ベトナム軍用ERDL、ノートンは韓国軍の迷彩服らしき物を着ている。入口には第５師団の部隊章と共に第２野戦軍の部隊章も描かれており、第５師団のLRP部隊創設に第２野戦軍の人員が大きな力となったことが窺える。

1970年の春に撮影された写真で左からブラウン、ウィーズ、ルッツの３人のレンジャー隊員が写っている。ブラウンは空挺章を付けたジャングルハットに何やら巻きつけており、ルッツは左肩に新型のナイロン製M16用弾薬ポーチとその下にコンパスを付けている。ローカルメイドの迷彩ベレーに記章の様な物が見えているが光の写り込みで、バッチやバッジの類が付いている訳ではない。

LRRP

カミーズアンドダイヤモンズ

Cammies and Diamonds

神出鬼没のダイヤモンド

ベトナムでは敵地の奥深くまで潜入し、偵察や索敵撃滅任務を行なう専門の部隊があった。長距離偵察を表すLong Range Reconnaissance Patrolの頭文字をとってLRRPと呼ばれた彼らは一般部隊と全く異なる装備と戦術で敵を翻弄し、レンジャー部隊に改編された後も数々の危険な任務をこなした。今回は機械化部隊の第5歩兵師団を支えたLRRPの物語。

by Jay Borman　構成／鈴木健太郎　コーディネート／河村喜代子

出撃準備を整えたジェリー フィンチとアンソニー ハウエル。ここでもリュックの一番上にXM28ガスマスクが付けられており、M34白燐手榴弾やM72対戦車ロケットも見える。ジェリーのサスペンダーにはファーストエイドポーチの下にレンザティックコンパスが下げられているが、この位置にコンパスを装着するLRRP隊員は他にも良く見られる。ヘッドギアはどちらもタイガーストライプのローカルメイド品で、ジェリーがブーニーハット、アンソニーがベレーと隊員の好みが表われている。アンソニーがERDLの下に着ているのは官給品のスリーピングシャツ。

腕をペイントしながらおどけてみせるラリーノリス。ライトウエイトリュックサック本体をフレームに高く固定し、下にはクレイモアバッグを付けている。リュックの上にはXM28ガスマスクと１クォート水筒、右にはラペリングロープ、左には煙幕手榴弾と三角巾も見える。M16ライフルのマズルキャップとスリングスイベルに施されたテーピングにも注意。

レッドデビルズの異名を持つ第５歩兵師団は1965年に第２旅団の２個大隊を第１歩兵師団への増援としてベトナムに派遣した後、68年には戦車や装甲車を装備した機械化歩兵師団となって同年７月から第１旅団が北ベトナムとの国境に設けられたDMZ（非武装地帯）沿いの地域で戦っていた。12月に承認された第１旅団の長距離偵察部隊、第79歩兵分遣隊（LRP）は人員が不足しており、隊員の中には第２野戦軍のLRP部隊である第51歩兵中隊（LRP）から転属してきた者もいたが、翌69年２月１日にレンジャー部隊に編入され、第75歩兵連隊P中隊（レンジャー）と改称すると、1971年８月31日に活動を停止するまで第１旅団を支え続けた。P中隊の主な任務は、偵察、ハンターキラーと呼ばれる索敵撃滅、爆撃効果判定で、チーム編成は一般的なハンターキラー任務の場合、チームリーダー、アシスタントリーダー、RTO（無線手）に３人のスカウトを加えた計６人だった。中隊メンバーは全員が志願で集められ、そのほとんどが空挺資格を持っており、機械化部隊らしく敵地域への移動にはヘリの他にAPC（装甲兵員輸送車）も使うというユニークな特徴を持っていた。また活動地域が北ベトナムとの国境に近かったため、P中隊の相手はよく訓練され装備の整った北ベトナム正規軍であることが多かった。

ヘリに乗り込むP中隊のレンジャー。少なくとも１人のレンジャー隊員がフルカラーのレンジャースクロールを付けており、記章に関しては隊員の好みが優先されていた様だ。真ん中の隊員は首に十字架のペンダントを下げている。

ヤンシン市場
Dan Sinh Market
104 YERSIN ST., 1
Ho Chi Minh
VIETNAM

ヤンシン市場内部のごった煮度も外側に劣らず突き抜けている。ミリタリー系のパッチ、バック、シューズ、ウエア、ヘルメット、ベルト、フラッシュライトと同列に「誰が着るんだろう」系のウエアとお土産アオザイが並ぶ。

ヤンシン市場には確実にミリタリー色をした各種アイテムがそろっている。本物そっくりだが、断定は禁物だ。たぶん大半はコピー品だ。レプリカという呼び名もある。ミリタリーグッズの販売は不可というベトナム国の建前がある。それに抵触しないよう、これらはファッションアイテムとして売られている。

ヤンシン市場があるイエルシン通りへは、ホーチミン市観光の基点であるベンタイサークルから歩いて行ける。市場はアメリカと戦争中だった1970年代に大きくなり、いちばん賑やかだった。当時は、米軍が放出した正規のサープラス品と、独自開発ルートからの横流しの軍モノを扱う市場だった。周辺には、アメリカ兵相手のバーが並び、彼らを吸い寄せる施設が並んでいた。その頃までは、確かに米軍が使う本物の軍モノがあった。だが、1975年を境にベトナム政府は、すべてのミリタリーグッズの販売を禁止。この共産党主導の政府が、ドイモイ政策へと舵を切るまで、ヤンシン市場は暗黒時代に沈んでいた。

第5回

サイゴン物語
Saigon Memories
はまるヤンシン市場

イエルシン通りに面した入口のヤンシン市場はワークウエア屋とパーツ屋に脇を固められている。蛍光オレンジの安全ベストや安全靴が並ぶ隣に自転車の部品、バイクのシート、中古家電に電気モーターと雑多なモノが集積しているあいだにぽっかりと暗闇に通じる口が開いている。この「闇の奥」に軍モノが山をなしている。ウォーマーケットの本丸はここにあり。

文／コンバットマガジン編集部　Text/CM Editorial Staff
写真／今井今朝春、WPPコレクション
Photo/Kesaharu Imai, WPP Collection

Cho Dan Sinh aka War Market in Saigon is an infamous crucible of military-colored goods, wears and watches.

『バイオハザード RE:2』&『ライトニングホーク .50AE 10インチ マグナポートカスタム』発売記念特別企画

竹内 潤氏×デカ島村 新春スペシャル対談

世界累計販売数8,500万本（2018年9月末時点）の大ヒットゲームソフト「バイオハザード」シリーズ。その第2作『バイオハザード2』のリメイクソフト『バイオハザードRE:2』が1月25日に発売された。また、それに伴い東京マルイから「ライトニングホーク .50AE 10インチ マグナポートカスタム」が発売予定。カプコンのCS第一開発統括、竹内潤氏とエアソフトトイガンを企画した東京マルイの島村優氏に、それぞれの開発秘話をうかがった。

●Photo by Kousuke Deai (Photo Office kong.)
●Text by Editorial staff

編集部：最初にファンを代表してうかがいます。『バイオハザード２（以下、バイオ２）』のリメイクに、何でこんなに時間がかかったのでしょうか（笑）？

CAPCOM 竹内 潤氏（以下、竹内）：こういった大規模なリニューアルって、映画では結構あるんですよ。『スパイダーマン』とか『バットマン』とか…。でも、ゲームでここまでの大幅なリメイク作品って実はあまりないんです。だから、社内でも需要があるのかどうかってさまざまな意見が出たんです。とりあえずプロトタイプを作って、社内でプレゼンしてようやくやる意味を分かってもらえた感じでした。お客さんにもまだ充分伝わってないところがあって“過去作のちょっとグラフィックをきれいにしてHDにした商品なんじゃないの？”って見方をされるのですが、そうではないんです！

東京マルイ広報 島村 優氏（以下、島村）：もうほとんど作り直しですよね。

竹内：その通り！　だから今回のキャッチコピーが“再新作”なんです。

編集部：なるほど！　じゃあ、もうまったく違うゲームとして生まれ変わっていると。これは一層期待がもてますね！

島村：実は今回の限定商品の話を最初に頂いた時、ボクも“？”って思いました。過去に出したデザートイーグルの限定品（※1998年発売デザートイーグル.50AE バイオハザード２モデル）を再販をするのかと思ったんですが「そうではなくコンセプトから新しいものに」とのことで。僕もちょっと混乱しました（笑）。

再新作『バイオハザードRE:2』にふさわしいモデルを!

編集部：私たちメディアの立場としては「ベースのストーリーはバイオ２でありながら、完全なる新作」という解釈でよろしいでしょうか?

竹内：問題ないです、新作です。ホントに。

編集部：楽しみですね。『バイオ２』といえば、２枚のディスクで表裏が楽しめるザッピングが斬新でしたけども今回もあるんでしょうか?

竹内：今回はザッピングではないんです。ただし、表裏のストーリーをレオン、クレアそれぞれ１回のプレイで楽しんでもらえるよう凝縮した内容になっています。再構築にあたって新たなシークエンスも加わっているので“こんなシーンなかったよね?”なんて場面も出てきます。

編集部：では、いくつかの選択があるわけですね?

竹内：そうです。最近の時流に合わせたゲームを作るとなると、シナリオも濃くなっています。たとえば「ガンショップKENDO」は、前の作品だと冒頭にちょっと出てくるだけだったのですが、今回は中盤にもっと設定を深くして出てきます。メディアの方にそこをプレイしてもらったりしたのですが「これ泣ける」っていう感想を結構頂いているんですよ。僕らは“ナラティブ”と呼んでいますが、真実味というかリアリティが増しています。警察署の中も部屋の配置などが変わってます。とはいえ、ファンの皆さんの印象に残ってるシーンはなるべく残しています。記憶にある階段とかも「ここだよ、ここ！」みたいなところは残しているんです。

編集部：ゲーム的には、謎解きの要素とアクションの要素どちらが強いんですか?

竹内：『バイオ２』の雰囲気を残そうと思い、謎を解くとか、一歩先にドキドキするような要素はしっかりと残しています。ただ昨今のゲームの主流に合わせるため、昔のように面倒くさいとか、難しいところを遊びやすくブラッシュアップした部分はあります。当時『バイオ２』を遊んでいた感覚をより新鮮に味わえるといった感じでしょうか。そしてなにより今回のポイントのひとつはゾンビ！　歴代シリーズの中でも屈指の出来だと自負しています！　当時、参考にしたロメロ（ジョージ・A・ロメロ）の『ゾンビ』の雰囲気を出せていると思います。

島村：プロットに力強く“ゾンビは走らない”って書いてありましたもんね（笑）

竹内：最近ゾンビのイメージがひとり歩きしちゃって、クリーチャーみたいになっちゃってますが、本来“動く死体”なんですよっ（キッパリ）。だから走るのはダメなんです！

島村：ゆっくり迫ってくるからこそ恐怖が生まれるわけですからね。それこそ走ってこられると判断力を試されるでもなく慌てて逃げるしかないのですから。

編集部：COMBAT読者の気になるところなのでお聞きしておきたいのですが、使用する銃器は新しいものが出てるんですか?

竹内：一番変わったのはデザートイーグルですかね。レオンといえばVPっぽい銃というイメージがあるのですが、もう一方で彼を象徴する銃がデザートイーグルですので、こちらは大幅にリニューアルしようと思いました。他に何が出るかは、お楽しみにしていてください。

島村：東京マルイとしても、一番最初にコラボさせてもらったのが『バイオ２』のデザートイーグルだったので、今回のリメイクに際して変えっちゃってもいいのかな？ と思ったのですが…。

竹内：1992年のコラボ第１弾の時は、すでにゲームが開発中だったので、ゲーム内に登場させるのは設定的に難しかったんです。その後サムライエッジをやる時は、最初からコラボ話ができたので不具合なくゲームに出すことができたんですね。ですから今回は原点に立ち返って細部を再考証しました。

島村：もちろんデザートイーグル以外の銃を出そうと思えばできないこともないのですが、時代設定をちゃんと考えたうえでデザートイーグルを再構築しようと。最新のデザインを反映させる手もありましたが、あくまで“当時存在しうるディティール”にこだわって製作したのが今回のライトニングホークなんです。

編集部：では時代設定はちゃんと考慮した上でのディティールなんですね。

竹内：はい。’98年当時ピカティニーレイルの規格はあったのか島村さんに調べてもらって、ギリギリあったことが判明して…。

島村：現在ではピカティニーレイルは当たり前ですが、’98年当時にあったのかを調べました。年代的に存在したので、デザインに落とし込みました。とはいえ、デザートイーグルそのものが完成されたデザインなので、これを変えるのはかなり難産でしたね。6インチと10インチ、両方考えなければならなかったし…。とくに10インチのロングスライドが特徴的なので、そこからデザインを考えていくんですが、まぁ苦労しましたね（笑）。

竹内：細かなやり取りが多くて、デザインがなかなか決まらなかったですね。

島村：単純にバレルを伸ばすだけだとバランスが悪くなってしまうんです。また新鮮味も出さなければいけませんし…。

編集部：ほかのゲームと比べても、これだけ３次元化されたコラボアイテムが発売されるケースは珍しいですよね。

島村：確かにあんまりないですよね。

編集部：「バイオ」シリーズにおいて一番似合わない言葉が“妥協”だと思うんです。そういった部分は東京マルイさんのモノ作りにも共通しますよね。

島村：やはりモノ作りという点で、似ているっていう話は竹内さんともさせてもらうんです。僕らも妥協せず新しいモノは求めていきたいし、新しい

New Year's special interview

ミリタリア・ラウンドアップ!

Militaria Roundup!

U.S. Caliber.30 M1ライフル（M1ガーランド）

第２次世界大戦でアメリカ軍歩兵の主力小銃として活躍し、その後も朝鮮、ヴェトナム戦争でも使用されたM1ライフル。第２次世界大戦後に日本を含む西側諸国に大量供与された事は有名だ。今回は若干趣向を変え、傑作軍用銃、通称“ガーランド・ライフル”を中心に紹介していこう。

●解説：菊月俊之　●写真：青木健格

撮影協力：●S&Graf ☎072-875-7741 https://www.sandgraf.jp/、●PKミリタリア☎080-5560-0842（http://margarate.militaryblog.jp/）

開発から制式化まで

1920年代はじめ、陸軍スプリングフィールド造兵廠では自動小銃の研究と試作に着手した。その設計を担当したのがジョン・ガーランドで、プライマー作動方式の銃を設計したが、思うような成果は挙げられず、設計をガス圧利用式に変更している。また民間でも自動小銃の開発が行なわれており、その中で最も成功した存在が.276口径（７㎜）のピダーゼン・ライフルだった。

これに注目した陸軍兵器局はガーランドに.276口径弾を使用する銃の開発を指示。そして完成した試作銃は、1929年にピダーゼン・ライフルを含む他の試作銃と共にテストを受ける。そして最終候補に残ったのがガーランドとピダーゼンの銃だった。ここで陸軍は制式弾薬の.30-06弾（1906年型.30口径弾）を使用する試作銃の開発を両者に指示するが、ピダーゼンの銃は構造的にハイパワー弾に不向きだった。こうしてガーランドの試作銃は1936年１月９日に“U.S. ライフル,キャリバー.30 M1”として制式採用される。

M1ライフルの生産は1937年からスタートするが、本格的な大量生産が開始されるのは'39年からで、'40年12月からはウインチェスター社が生産に参加。第２次世界大戦終結までに402万8,395挺を生産。戦争終結で生産は終了したが、朝鮮戦争（1950～53年）の勃発で再生産が行なわれ、民間のハーリントン&リチャードソンおよびインターナショナル・ハーベスター社が生産に参加している。またM1ライフルは第２次世界大戦後、日本を含む西側諸国に供与され、ヴェトナム戦争（1962～75年）でも南ヴェトナム軍や韓国軍によって使用されている。

M1ライフル

ケンタッキー州フォート・ノックスで広報写真のためにポーズをとる陸軍兵士。撮影は1942年でヘルメットはM1917A1と旧式だが、M1ライフルはガス・ポート式（後述）のガス・シリンダーを装備した新型となっている。後方の車輛はM3ハーフトラックで、撮影場所とM1936フィールド・バッグから兵士は機甲師団所属の機甲歩兵と思われる。

M1903ライフル

M1ライフル前のアメリカ軍制式ライフルだったM1903ライフル（通称“スプリングフィールドM1903”）。基本的のドイツのモーゼルGew98をベースにした.30口径ボルトアクション式で、使用弾薬の.30-06弾はM1ライフルにも使用されている。バリエーションとしてM1903、M1903A1、M1903A3、そして狙撃型のM1903A4の４タイプが生産された。M1ライフルが採用されて大量生産が開始されると順次交代し、第２次世界大戦では主に後方部隊で使用されている。

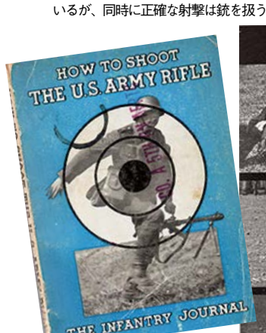
●DATA：口径.30インチ（7.62㎜）、全長107.8㎝、銃身長60.9㎝、重量3.94㎏、装弾数５発。

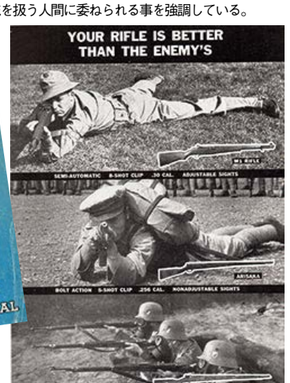
ジョン C. ガーランド　JOHON C. GARAND（1888~1974）

M1ライフルの設計者であるジョン C. ガーランドはカナダのケベックに生まれたフランス系カナダ人で、1898年頃に両親がアメリカのコネチカット州に移住。彼は射撃の趣味もあって銃器設計に興味を持つようになり、第１次世界大戦中に自動火器の図面を海軍に提出した事がきっかけで国立標準局に勤務。1919年には陸軍のスプリングフィールド造兵廠の技師として勤務し、自動小銃の設計開発に携わるようになる。こうして完成したのがM1ライフルで、その後も自動小銃の設計・試作を行ない'52年に引退。'74年に死去した。

M1ライフルVS枢軸軍主力ライフル

写真は1943年に歩兵ジャーナル社（The Infantry Journal, Inc.）が発行した“How to Shoot the U.S. Army Rifle”と題する冊子で、M1ライフルの操作方法を多数の図版で紹介している。ここで示したのはM1ライフルを日本軍の三八式歩兵銃（アリサカ・ライフル）とドイツ軍のモーゼルKar98と比較したページ。解説には「アリサカ・ライフルはM1より射程が短く、弾丸も軽く、サイトにはウインデージ機能がない。Kar98はM1903ライフルに似た５連発のボルト・アクション式だが、サイトにウインデージ機能がなくアメリカ軍ライフルほど正確ではない」とM1ライフルが枢軸軍ライフルに勝る事を強調しているが、同時に正確な射撃は銃を扱う人間に委ねられる事を強調している。





軍用小銃の自動化

19世紀に前装式（マズル・ローダー）から後装式（ブリーチ・ローダー）へ進化した軍用小銃はボルト・アクション・メカニズムによって完成の域に達したが、次なる技術的課題はその自動化だった。軍用自動小銃で先鞭をつけたのはメキシコのマヌエル・モンドラゴン将軍が設計したモンドラゴンM1908で、製造はスイスのSIG社が担当。しかし折からの革命でメキシコ軍には納品されず、第１次世界大戦でドイツ軍航空隊が使用している。また第１次世界大戦中にはロシアとフランスも自動小銃を採用したが、その使用量は限られていた。

各国軍における自動小銃の評価は様々で、肯定派は個人火力の増大を利点とし、否定派は構造面の弱さ、そして自動化は弾丸の浪費に繋がると主張した。その中で独自に自動小銃を開発したのがアメリカとソ連で、第２次世界大戦中にはドイツと日本も自動小銃を開発している。しかし第２次世界大戦中に全軍で自動小銃化を達成したのはアメリカのみで、その背景には強大な国力と工業力があった。

.276 ピダーゼン自動小銃

J.ガーランドのライフルとアメリカ陸軍制式の座を争ったピダーゼン（Pedresen）・オートマチック・ライフル。ルガーP08でお馴染みのトグル・アクション式が特徴で、口径は.276インチ（７㎜）。開発者は銃器設計者のジョン D.ピダーゼンで、第１次世界大戦中にはM1903ライフルに装着する自動遊底を開発した事で知られる。ピダーゼン・ライフルは'25年に開始された陸軍のトライアルに提出されて好成績を収めたが、.30-06弾を使用するには構造的に問題があり、制式採用は見送られた。

M1ライフル 各部名称

M1ライフルの作動方式

M1ライフルは発射ガスの力を利用するガス・オペレーション・システムを採用している。弾丸を発射すると発射ガスの一部がガス・ポートからガスシリンダー内に導かれ、オペレーティング・ロッドを勢いよく後退させる。ロッドにはボルトと噛み合わせるカムが設けられており、後退しながらボルトの閉鎖を解放する。ボルトは後退を始め、エキストラクターとエジェクターが空薬莢を排出。完全に後退したボルトはハンマーをコックし、今度はリコイル・スプリングの力で再度前進。次弾を装填し、ボルトが閉鎖されて撃発状態になる。そして、トリガーを引くたびに同じ動作が繰り返され、最終弾を発射するとクリップが空薬莢と一緒に飛び出す。

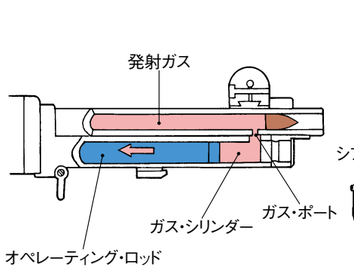
マーキング
レシーバー後方に入れられた刻印。写真のM1ライフルはスプリングフィールド造兵廠（Splimgfield Armory）製のシリアルナンバー“2578028”で、1944年３月から６月の間に生産されたうちの１挺。ただし部品の一部が交換されており、生産当時とは状態が部分的に異なっている点に留意されたい。

無可動実銃
今回撮影に使用したM1ライフルは発射機能を取り除いた実物、すなわち無可動実銃だ。安全のため薬室と銃身数か所に穴が開けられているほか、ボルトやパーツ同士を溶接加工し、一部パーツも部分的に切断、あるいは取り外す等の安全対策が施されている。

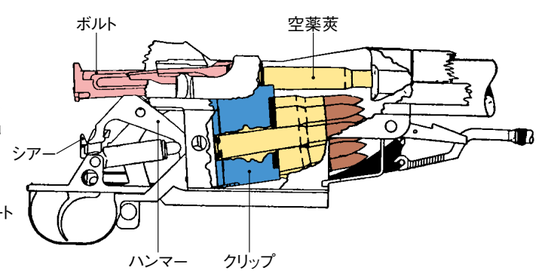
M1ライフル　DATA※

銃本体
口径：.30インチ（7.62㎜）
重量（本体）：９ポンド９オンス（4.34㎏）
全長（本体）：３フィート７ 5/8インチ（115.2㎝）
全長（M1銃剣装着）：４フィート５インチ（134.62㎝）
銃身長：24インチ（60.9㎝）
作動方式：ガス圧利用式
給弾：クリップ式
冷却方式：空冷
初速：2,800フィート（853.4m）/秒
最大射程：3,500ヤード（3.2㎞）
使用弾薬：.30口径通常弾、徹甲弾、曳光弾、空砲、疑似弾
クリップ装弾数：８発

※DATAは1949年４月発行のアメリカ陸軍マニュアルTM9-2200“Small Arms Materiel and Assosiated Equipment”による。



銃口の38㎜後方にはガス・ポートが開けられており、発射ガスの一部がここからガス・シリンダーへと導かれ、オペレーティング・ロッドを後退させる。



後退したオペレーティング・ロッドは９㎜後退した時点でボルトの閉鎖の解放を始める。この距離の「遊び」は弾丸が完全に銃口から飛び出し、薬室（チャンバー）の圧力が低下してからボルトを解放するための安全メカニズム。

8連クリップ
M1ライフルは８連クリップごと装填し、途中で補充はできない。クリップは最終弾発射後に空薬莢と一緒に飛び出すが、この際に甲高い金属音を立てる。クリップへの装填は左側から始め、一番上の弾丸が右側にくるようにする。これは装填を容易にするのが理由で、工場でクリップに装填する場合も同様とのこと。（撮影協力：PKミリタリア/M1ガーランド30-06弾８発クリップセット/価格3,800円）